

防寒服を着た絵描き

大塚喜子

ベッドの中の達子は欄間から垂直に差し込む白い明かりの中にいた。窓は雪で覆われ部屋の中は暗い。時刻は午後の三時をまわったようだ。

夫の満男が出張で東京の本社に出かけたのは二日前だった。風音が居丈高に空高く抜けていくのに、窓の向こうに吹雪の気配はない。それは三十坪の平屋のこの家が、雪の中にすっぽり埋まった事を意味していた。

静寂の中で再び睡魔が襲う。石油ストーブのサーモスタットの作動音と壁時計の電子音以外はこの家に何ら気配はない。

十勝平野の中央に位置する音更町は、日本有数の厳寒地だが、積雪は札幌や函館に比べると遥かに少ない。十二月になると町のいたるところにスケートリンクが造られる。この町は過去にオリンピックのスケート選手を何人も輩出した町として全国に知られている。

製薬会社に勤務する夫が帯広大学の研究室と共同で製品開発をすることになって、七年前に夫婦は東京から帯広に移ってきた。

こうして四日間も雪が降るのを経験するのは始めてだ。このまま降り続いて、屋根の雪を下ろさなければ、家は雪の重みで潰れるかもしれない。家が押しつぶされた時の事を想像したが、不思議と恐怖心は湧かなかった。毎朝聞こえてくる集団登校の生徒等の声が今朝は聞こえない。学校は臨時休校になったのだろう。朝から除雪車が何度か鈍い音をさせて家の前を通り過ぎるから、町が稼働していることは確かだ。

正午のテレビニュースは十勝空港が閉鎖され、札幌間の国道とJRは不通になったと伝えた。

玄関口でドスンと何かが落ちる鈍い音がした、達子は猫のように聴き耳を立てて身構える以外何も出来ない。

「貴方なの：」夫を呼んでみたが、喉のあたりが絡まって声にならない。夫が帰ってくるのは三日後の予定だ。土間で長靴を脱いでいるらしい気配が廊下を挟んで聞こえる。ドアが荒々しく開き、頭の大きなバケモノが入ってきた。達子は息を止めて前を見据えた。バケモノと思っただのは男が着ている特大の防寒服のせいだと判るのに暫く時間がかかった。部屋の暗さに戸惑い

ながら男は辺りを透かすように見まわして

「なんだ・・・いるじゃないか」太い声で凄んだ言い方をした。達子は益々声が出なくなつた。女一人でいることを悟られまいと思案したが、妙案などない。

「…すまないが：休ませてもらうよ」男はいくらか下手になりながら達子に近づいてきた。ベッドから身を起こそうとしない女に戸惑っている。

「四日前に十勝に来たが、金を使い果たした。飛行機が飛ばないから帰れない…」

「冬の十勝川を描きたくて三年来ここへ来ているが、こんな大雪に出合うのは始めてだ」とも言った。男がベッドの脇に仁王立ちになって喋るのを達子は黙って聞いた。実際にそうする以外ない。どうしたものかと思案しながら：まづは起き上がることにした。

麻痺していない右手で天井から下がっているロープを握って、ベッドの端にじり寄り、車椅子にストツパーをかけて、それに移った。男は達子の身体の状態を理解した筈だが、驚いたふうもなくて、何も言わなかった。

「お金をもってきます」男に背を向けて、壁に向かってキツパリ言い放つたつもりの達子の声が震えている。返事がないので振り向くと、男は防寒服を脱いで長髪をしきりに撫でつけていた。身体は意外にも華奢で頼りなげだった。少しの沈黙の後、台所に行こうとする達子の車椅子の背を男が慌てて、不器用に押した。達子が前にのめり乍ら顔を上げると、正面の姿見の鏡の中で男は畏まっている。

達子は男が入ってきてから始めて息をしたような気がした。だからと言って危ういことには変わりはないのだが。

食卓の引き出しを開けると一万円札が5枚あった。其れを封筒に入れてテーブルの上に差し出したが、男は一瞥しただけで、達子の脱げかけた内履きの踵を覗いて直してくれた。温風に煽られた男の頭髪が微かに揺れて、絵の具の匂いに混じって、夫のとは違う男の体臭が達子の五臓六腑を占めた。今朝から何も食べていないことに気づいて

「蕎麦を茹でましょう」と呟きながら湯を沸かして、ぎこちなく向きあうと男は

「この黒い十勝蕎麦は帯広でしか食べられない」と言いながら男は音をたてて啜った。空高くでは再びかき回すような吹雪が舞っている。

「玄関のカギは直しておいた方がいい」男は言いながらどんぶりと鍋を洗っ

た。

週に2回来る福祉サービスのヘルパーさんが昨日帰る時に

「玄関ドアが雪の重みで鍵が掛かりづらい」と言っていたのを思い出した。

「蝶番を締めなおせばいい。ねじ回しはあるかい」

達子は流しの下に大工道具があるのを教えた。

「こういうことも一人でするの？」

「いいえ、何時もは夫がいますから：出張ですが、帰ってきます」一気にしやべり終えて少しホツとした。更に夫の出張は度々の事で自分はこうして不自由な体だが留守をするのに慣れているとも話した。嘘を言ったわけではないが出張先が東京だとは言わなかった。

「そりゃこの雪で旦那さんは大変だ」男は道具箱を持って部屋を出て行った。

部屋に戻って新聞を読む男の傍らで、達子は器用に半身で米を研ぎ、鮭を焼き、芋を煮た。男は達子の手元を気遣う眼差をするだけで、八時になっても帰ってこない夫の事は何も聞かなかった。

向き合って夕飯を食べ始めると、男は「家庭料理を食うのは久しぶりだ」と言った。

「絵描きさんですか？」

「絵描きになり損ねた男だよ」自嘲気味な言い方だった。慌てた達子は傍らに無造作に置かれた大きな荷物に目をやりながら

「この中にある絵が見たい」と言ってみたが、返事はなかった。

テーブルの上に置かれたままの封筒に手を添えて「音更駅前に旅館がある」と教えた。同時に隣の部屋の押し入れに夜具があるとも言った。

時刻は午後の十一時を回った。

夜中に胸苦しさに目を覚ました時、男は既に達子の上にあった。

男の体臭が達子の下肢に纏わりついたが、夫への後ろめたさはなかった。男は闇の中を車椅子に躓きそうになりながら部屋を出て行った。

達子が脑梗塞で倒れてから三年が経つ。町立病院に2か月間、引き続いて隣の帯広のリハビリ病院に半年間入院した。顔面の麻痺は殆んど目立たなくなり、言語の機能も回復したが、自分の脚で立ち上がって、歩行することは生涯叶わ

ないと判った。現在では週に二回福祉事務所から来てくれるヘルパーさんから家事の援助と、入浴の介助を受けている。

翌朝、目を覚ますと男の姿はなく達子はホツとしたが、どこかではっきりもした。ソファアの上に毛布と布団が畳まれて、上に枕が乗っていた。

男の荷物が玄関に置かれたままになっているのに気付いたのはそれから三十分程した後だった。達子は再び飯を炊き、男を待った。男はなかなか戻ってこなかった。雪はやんだらしい。

高窓からさす朝の陽ざしがキラキラと窓の向かい側の壁に揺れては、跳ねている。部屋の中は信じられない静けさと明るさだ。

男は十時過ぎに小さなスケッチブックを抱えて戻ってきた。

「飛行機はすぐには飛ばないらしい。飛行場の再開は午後になるらしい」と言いながら近くの堤防を描いた絵を達子に見せた。

達子はこの堤防を夫と毎朝走るのが日課だったことを思い出した。時折は近くの河原に降りて花を摘んだりもした。

夫は大学での研究の進み具合を嬉しそうに説明してくれた。話が弾んで出勤時間に遅れそうになって、ジャージ姿のまま走って研究室に向かう夫の背を堤防から見送ったことが何度かあった。

あの頃の事を、今頃になって夢に見ることがある。右手で摘んだエゾムラサキつつじが、受け取った左手からこぼれていく。摘んでも、摘んでも花は束にならない。夢の中でも達子の左半身は麻痺している。夫と話したいのに夢の中でも夫は寡黙で、何も語ってくれない。目が覚めるのはそんな時だった。

達子是用意した朝食を、男の前に並べた。男は黙々と食べて、昨晚と同じように流しで食器を洗い始めた。水が流れる音と食器が触れ合う音を聞きながら、涙があふれて、肩が震えた。それらを必死で耐えていると

「奥さん…」突然声がした。

「…昨夜は済まん事でした」

男はこちらに背を向けたまま心持ち頭を下げた。達子もつられて頭を下げた。

男がこの家に入ってきた時の凄み方を思い出したが、今の男は優しく気弱そうに見える。

「いやなら、拒んでくれていいよ」と言いながら夫は時折、妻の寝室に
達子は夫を拒んだことはない。

出向期間の七年が終わろうとしている。四月には東京の本社に帰ることが決
まった。達子は夫と話がしたいのに、二人の話は何時も続かない

「足手まといの私の面倒見てくださっていつも感謝しています…」

「…何も言わなくていい…」

「……」

「どうぞ部屋にお戻りになって下さい…。明日のお仕事に障りますヨ」

「そうだな…そうしよう…おやすみ…」

「お休みなさい…」二人の日常は平穩無事に過ぎていく。

達子がベッドに戻ると、男が部屋に入ってきた。達子は身体を右に寄せて、
左側をあけた。男と並ぶと達子は我を忘れた。

男が果てたとき、隣の部屋の時計が十一時を打った。

「何を考えているの？」達子の問いに答えはなかったが、男が埼玉へ帰ること
を考えているのは明白だ。

このまま飛行機がとばなければいい。道路や鉄道が不通のままだったらどう
なるのだろう。夫は帰ってこない。この男も帰れない。

男の手が達子の麻痺側の頬を撫でた。達子は目を瞑り、再び男のなすがまま
に任せた。

瞼の裏で達子は男と手をつないで十勝の雪原を走った。繋いでいる手から男
の体温が達子の全身を駆け巡る。二人の巻き起こす雪煙が凍った十勝川にあえ
なく消えていく。微かに足がうずく気がして我に返ると、ベッドのマットの下
に昨夜、自分の身を守るために、男の目を盗んで台所から持ってきて、忍ばせ
ておいた出刃包丁の柄に右手が触れた。達子は男を帰すまいと其れを手を取っ
て、満身の力を込めて男の心臓をひと突きした。目をむいた男は起き上がろう
としながら力尽きてのけぞった。

ベッドはみるみるうちに男の血で染まった。

昭和五十三年一月十三日、十勝日報朝刊は「十日午前十勝支庁稲田町5番地主婦山田達子さん（三十五歳）は麻のロープで首を吊って死んでいる所を帰宅した夫により発見された。山田さんの側には男が血を出して倒れて死亡していた。十勝署の調べでは男は無職今野一（三十歳）で前夜山田さん宅に押し入ってもみ合いになり山田さんに出刃包丁で心臓を突かれて死亡したものとみられる」と簡単に報じている

完